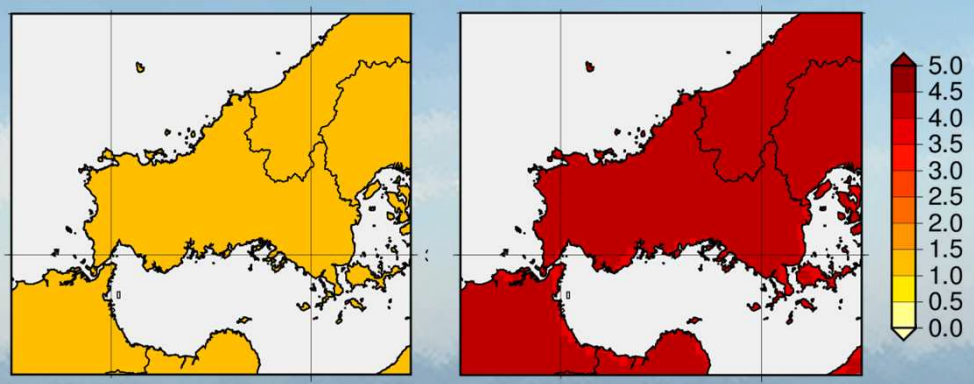
山口県の気候変動

「日本の気候変動2020」（文部科学省・気象庁）に基づく地域の観測・予測情報リーフレット



21世紀末における20世紀末からの気温上昇量
（左）2℃上昇シナリオ　　（右）4℃上昇シナリオ

このリーフレットでは、以下2つの将来予測を掲載しています。

2℃ 上昇シナリオ（RCP 2.6）

21世紀末の世界平均気温が
工業化以前と比べて約2℃上昇。
パリ協定の2℃目標が達成された世界。

4℃ 上昇シナリオ（RCP 8.5）

21世紀末の世界平均気温が
工業化以前と比べて約4℃上昇。
追加的な緩和策を取らなかった世界。

令和4年3月
下関地方気象台・福岡管区気象台

地球温暖化の影響について

気候変動はさまざまな分野に影響を与えます

自然災害	大雨の増加による水害の発生 海水位上昇による高潮の発生	農業	水稲の品質低下 野菜、果樹の生育への影響 病害虫の分布拡大
自然生態系	野生動物生息域の変化 森林の植生の変化	水産業	魚介類の分布域の変化 藻場の変化
健康	熱中症リスクの増加 感染症発症リスクの変化	産業・経済活動	自然災害による活動の低下 自然を活用した産業への影響
水環境・水資源	気温上昇による水質の変化 降水の変化による渇水の発生		

＊気候変動による影響の詳細は環境省の「気候変動影響評価報告書」をご覧ください

（参考）予測シナリオについて

本リーフレットでは、気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第5次評価報告書（AR5）で用いられたRCP2.6シナリオとRCP8.5シナリオに基づき将来予測を行っています。

RCP2.6シナリオでは、21世紀末（2081-2100年）の世界平均気温が、工業化以前※と比べて0.9～2.3℃上昇する可能性が高いことから、本リーフレットでは「2℃上昇シナリオ」と表記しています。これは、パリ協定の2℃目標が達成された世界であり得る気候の状態に相当します。RCP2.6はIPCC第6次評価報告書（AR6）のSSP1-2.6に近いシナリオです。

RCP8.5シナリオでは、21世紀末（同上）の世界平均気温が、工業化以前と比べて3.2～5.4℃上昇する可能性が高いことから、本リーフレットでは「4℃上昇シナリオ」と表記しています。これは、追加的な緩和策を取らなかった世界であり得る気候の状態に相当します。RCP8.5はIPCC AR6のSSP5-8.5に近いシナリオです。

※1750年より以前の期間を示しますが、世界的な観測が行われるようになった1850-1900年の観測値で代替しています

全国の情報はこちら

日本の気候変動2020
（文部科学省・気象庁、令和2年12月公表）

大気と陸・海洋に関する
観測・予測評価報告書

日本の気候変動の
現状と予測に関する最新の知見を紹介

九州・山口県の情報はこちら

福岡管区気象台HP
九州・山口県の気候変動の現状と予測

九州・山口各県の
気候変動の現状と将来予測を掲載

九州・山口県　気候変動　検索

下関地方気象台
福岡管区気象台

下関市竹崎町4-6-1　TEL: 083-234-4007

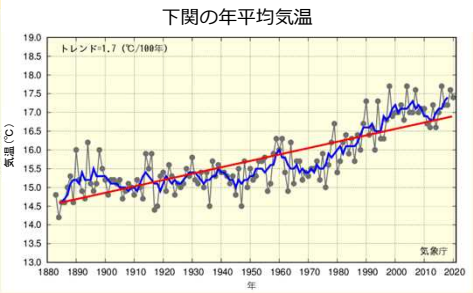
福岡市中央区大濠1-2-36　TEL: 092-725-3614

気温の上昇

山口県の気温は上昇を続けており、将来はさらなる上昇が予想されています。

観測事実

下関の年平均気温は
100年あたり1.7℃上昇



黒の細線：年平均気温　　青の太線：気温の５年移動平均
赤の直線：この期間の長期変化傾向
＊地球温暖化に加え都市化や自然変動も含む

将来予測（21世紀末）

4℃上昇シナリオ

山口県の年平均気温は

4.1℃上昇

2℃上昇シナリオ

山口県の年平均気温は

1.3℃上昇

＊20世紀末（1980-1999年）と
21世紀末（2076-2095年）の比較

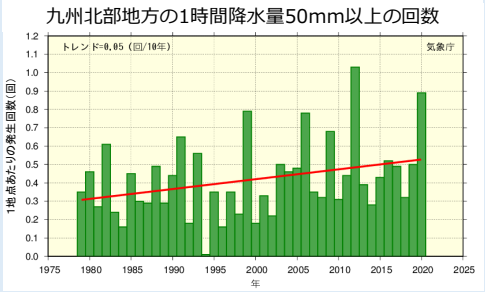
大雨の増加

気温の上昇により、大気中に含むことのできる水蒸気の量が増えることから、大雨も増加しています。
雨の降らない日も増加し、雨の降り方が極端になり災害のリスクが高まると考えられています。
平成30年7月豪雨には気候変動の影響があったと評価されています。（「日本の気候変動2020」本編コラム２より）

観測事実

山口県を含む九州北部地方の
短時間強雨の回数は

40年間で約1.5倍に



緑の棒：各年の1時間降水量50mm以上の回数
赤の直線：この期間の長期変化傾向

将来予測（21世紀末）

4℃上昇シナリオ

山口県を含む九州北部地方の
短時間強雨の回数は

約1.9倍に

2℃上昇シナリオ

山口県を含む九州北部地方の
短時間強雨の回数は

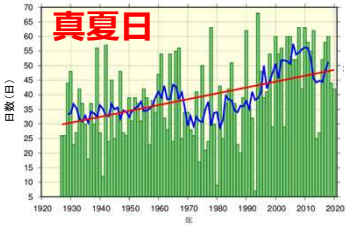
約1.3倍に

＊20世紀末（1980-1999年）と
21世紀末（2076-2095年）の比較

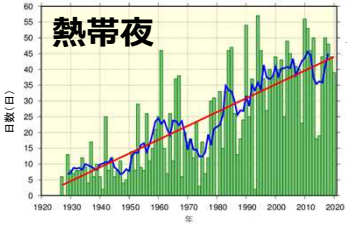
真夏日・熱帯夜の増加

山口県の真夏日、熱帯夜の日数は増加しており、将来は更なる増加が予想されています。

観測事実



下関の真夏日は
10年あたり
約2日増加



下関の熱帯夜は
10年あたり
約4日増加

緑の棒　：各年の真夏日・熱帯夜の年間日数
青の太線：真夏日・熱帯夜の年間日数の５年移動平均
赤の直線：この期間の長期変化傾向

将来予測（21世紀末）

4℃上昇シナリオ

山口県では
真夏日は約60日増加
熱帯夜は約59日増加

2℃上昇シナリオ

山口県では
真夏日は約18日増加
熱帯夜は約16日増加

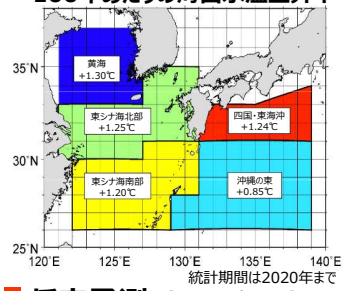
＊20世紀末（1980-1999年）と
21世紀末（2076-2095年）の比較

海水温の上昇

観測事実

九州周辺の年平均海面水温は
100年あたり0.85～1.30℃ 上昇
＊世界平均の2倍以上の割合で上昇

100年あたりの海面水温上昇率



統計期間は2020年まで

将来予測（21世紀末）

東シナ海北部は

2℃上昇シナリオ	4℃上昇シナリオ
1.22℃上昇	3.54℃上昇

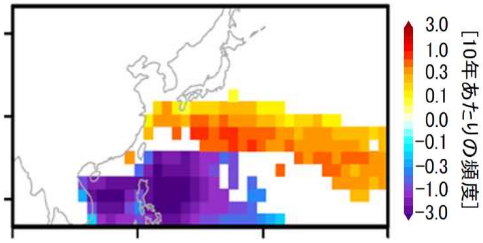
＊20世紀末（1980-1999年）と
21世紀末（2076-2095年）の比較

台風の強度

将来予測（21世紀末）

日本付近の台風の強度は強まると予測される

猛烈な台風が存在する頻度の変化



平成29年10月26日　気象研究所・気象業務支援センター報道発表資料より

4℃上昇シナリオ

日本の南海上で猛烈な台風の
存在頻度が増加する予測

猛烈な台風とは
気象庁の定義では最大風速54m/s以上を指す。
ただしこの研究では最大風速59m/s以上を対象。

＊1979～2010年と21世紀末の比較